慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	The Beggar's Operaの制作時期について
Sub Title	The Beggar's opera and the date of composition
Author	海保, 眞夫(Kaiho, Masao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1998
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.75, (1998. 12) ,p.144(237)- 158(223)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本晶教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

The Beggar's Opera の制作時期について

海保　眞夫

はじめに

18世紀前半のイギリス演劇のなかで，今日なお生命を保っているのは John Gay の *The Beggar's Opera* のみと評しても過言ではない。空前の成功をおさめた1728年の初演以来，18世紀には毎年のように上演された。19世紀前半においても依然として商業劇場の寵児であったことは，この諷刺音楽劇をこよなく愛した William Hazlitt の劇評からも察せられよう[1]。Victorianism の深まりゆくなかで，*The Beggar's Opera* の卑猥と辛辣な社会諷刺が敬遠されるにいたったのは仕方がないとして，20世紀に入って華々しく復活する。1920年，Nigel Playfair による公演が1500回近い長期興行となったことは有名であるが，その後プロあるいはアマチュアによる上演は文字通り数知れない。1953年には Laurence Olivier の主演で映画化もされている。1984年，Alan Ayckbourn が *The Beggar's Opera* のリハーサル風景を題材とした喜劇 *A Chorus of Disapproval* を発表して当たりをとったのも，現代の観客が Gay の作品に親しんでいることの証左といえよう。この *A Chorus of Disapproval* もやはり1990年に映画化され，主演の Jeremy Irons はアカデミー主演男優賞を獲得した。

それと同時に，Gay に関する研究の盛んになってきたことも，目を見張らせるものがある。比較的近年に例を限っても，戯曲，詩，散文のテクストが注釈を添えて次々にオックスフォードから出版され[2]，また David Nokes が W.H.Irving 以来の本格的な伝記を発表した[3]。Gay の戯曲，特に *The Beggar's Opera* に関しては，Robert D.Hume, Peter E. Lewis,

Calhoun Winton らの考察が注目されよう[4]。さらには，Gay を Tory 派文人のサークル，すなわち Scriblerus Club の一員という観点からとらえることも，現在の流行のテーマといえるかもしれない[5]。

このように，専門家および一般読者の広範囲な関心を集めつつある Gay ではあるけれども，*The Beggar's Opera* をめぐる定説に重大な矛盾が存在することは，いずれの論者も言及しようとしない。彼らはこの矛盾の解明に努めるどころか，問題の重要性すら認識しないといった風である。Gay が友人の Jonathan Swift および Alexander Pope と交わした書簡を虚心に検討するとき，矛盾の存在はだれの目にも明らかであるだけに，研究者たちの沈黙は不可解と評するほかはない[6]。

この小論が目指しているのは，第一に問題の所在を明白にすることにあるが，それと同時に，定説が打破された場合の意義についても考察を試みたいと思う。これは Gay のみならず，この時代の文人と patronage の関係について，重要なヒントを提供するものである。ただし，その結果明らかになる Gay や Swift らの実像は，現代人の目から見てかならずしも名誉あるものとは認め難いから，研究者の沈黙をそのためと解釈したい気もするが，それでは邪推が過ぎるだろうか。

I．*The Beggar's Opera* の執筆の動機

The Beggar's Opera をめぐる問題点とは，執筆の動機と制作時期とに関するそれぞれの定説が実は互いに対立し合っていることである。一方が成立すれば，もう一方は成立しえないにもかかわらず，これまで両者の比較検討が行なわれずに，それぞれ別個に信じられてきたのだ。この作品は首相の Sir Robert Walpole にたいする露骨な人身攻撃を多数含んでいるが，これは Gay の個人的怨恨に発するものとみなされてきた。念願としていた宮廷への就職を Walpole に阻まれたのが原因だというのである。この説はすでに同時代人によって唱えられ，以来定説として現在に受け継がれている。18世紀の証言を二例紹介しよう。最初の証言は Walpole の側近だった Lord Hervey の *Memoirs of the Reign of George II* からの

引用である。

> Gay とかいう詩人がバラード・オペラを発表したが，それは宮廷を多少批判し，首相を大いに揶揄した著作と一般にみなされている。この種の作品としては非常に優れているので，作中で諷刺された人びとも怒りを抑え，世人の賞讃に調子を合わせておくのが賢明だと考えたほどである。Gay は宮廷に地位が得られなかったため，自分の希望を阻止したと思われる人びとに諷刺の矛先を向けたのだ[7]。

Hervey が *Memoirs* を執筆し始めるのは1733年頃とみなされているが，彼は自分の日記を資料として用いているから，Walpole にたいする怨恨という説はほとんど *The Beggar's Opera* の上演と同時に広まったと考えてよいだろう。

次に紹介するのは1776年に出版された Sir John Hawkins の *A General History of the Science and Practice of Music* の一節である。Hawkins は *The Beggar's Opera* に否定的な態度を執った評者であるが，Gay とは世代を異にするから，二人のあいだに個人的交渉があったわけではない。執筆の動機を怨恨に帰する説は，18世紀後半にはすでに定着していたものと思われる。

> Gay 氏がこの芝居を発表した動機，特に作中で政治家，法律家，聖職者などを毒々しく罵った動機は，実は彼が宮廷にポストを求めたにもかかわらず，その願いが叶えられなかったからである[8]。

この個人的怨恨説は，20世紀に入って確固たる定説として受け継がれ，Gay と *The Beggar's Opera* を論じる人びとがきまって繰り返すことになる。以下に，無作為に選んだ三つの例を掲げよう。(1)は Walpole の standard biography として定評のある J.H.Plumb の著作からの引用である。同書はだれも読まないと見えて，未完の伝記であることは指摘する者がない。

> (1) Walpole は Gay を小馬鹿にして，おなさけの飴玉を彼に放り出してやった。首相の心ない仕打ちは，驚くほど多方面な諷刺音楽劇 *The Beggar's Opera* によって見事なしっぺ返しを受けた[9]。

（2） Gay は新王妃から適当なポストが与えられるものと期待していたが，1727年の秋に宮廷人事が発表されたとき，彼に割り当てられたのは末の王女 Louisa の式部官の地位に過ぎなかった。Gay はこれを Walpole による故意の侮辱とみなして直ちに辞退した。夢破れた Gay は首相に背を向け，三ヵ月後には *The Beggar's Opera* で空前の成功をおさめることになる[10]。

（3） *The Beggar's Opera* は1727年の秋に執筆された。すなわち，宮廷に地位を得て生活の安定をはかりたいという Gay の長年の夢が無惨にも破れた時期においてである[11]。

しかしながら，Walpole にたいする Gay の個人的怨恨という説は，はたして成立するのだろうか。先ずこの問題から検討することにしたい。Gay が宮廷に地位を得るのを念願としていたのは事実である。彼は世事にうといナイーヴな詩人といったポーズを生涯とり続け，彼の死後は Swift と Pope がこのイメージの保存拡大に努めることになるが，現実には彼の処世はきわめて抜け目がなかったと評してよい[12]。1708年，処女作 *Wine* で Whig 派の政治家 Sunderland, Halifax, Godolphin らに媚を売り[13]，Joseph Addison や Richard Steele など，同派の文人たちと関係を持つ。その後 Tory 派に移ったのは，1710年に Tory 政権が誕生したことと無縁ではないだろう。Swift や Pope とともに Scriblerus Club のメンバーとなり，1714年，*The Shepherd's Week* を Tory 派の大臣 Bolingbroke 子爵に捧げている。だが，Anne 女王の死と Hanover 王朝の成立によって Tory 政権が崩壊したため，Gay の願いは叶えられなかった。彼はなおも諦めず，王太子妃 Caroline のサークルに接近する。そして，10余年を経て，ようやく Gay の夢が実現しそうな機会が訪れた。1727年6月，George 一世の死去と George 二世の即位にともない，Garoline が王妃の座に就いたのである。Gay はすでにこの年の始めに *Fables* を彼女の次男 Cumberland 公に捧げて，準備を整えていた[14]。はるか後年の Swift の回顧によれば，王妃は女官の Howard 夫人に「かならず Gay 氏をとりたてる」と約束したという[15]。王妃のこの言葉はもちろん Gay にも伝え

られたであろうから，彼の胸は期待で高鳴ったに違いない[16]。

George 二世の戴冠式は1727年10月11日に行なわれ，その直後に宮廷の新人事が発表さた。だが，Gay に用意されたポストは二歳の王女の式部官という道化も同然の地位であったため，彼は直ちに王妃に辞退の意向を伝えるとともに，その旨を Swift と Pope に報告している。すでに記したように，Gay を愚弄した元兇は首相の Walpole とみなすのが従来の定説であるが，実は伝記作者たちの意見はかならずしも一致していない。J.H. Plumb は，「首相は義弟で国務大臣の Townshend らとディナー・テーブルを囲み，ボルドー産のワインを急速に消費しながら，Gay に二歳の王女のお守り役を当てがうという傑作な案を思いついた」と見てきたようなことを記している[17]。だが，18世紀の Walpole の伝記作者 William Coxe は首相の関与を否定しているし[18]，Gay の最新の伝記作者 David Nokes も，宮廷側に Gay を侮辱する意向があったという説に疑問を表明した[19]。

もちろん，権力者の常として Walpole がいかにささいな人事にも口をはさんだであろうことは十分に想像できるし，すでに記したように同時代人は一斉に Walpole の差し金と噂した。実はこの噂の流布には Gay の友人たち，特に Swift の発言が大きく寄与している。1727年11月，彼は直接 Gay にあてて，「政府部内に執念深い敵がいるのは疑いえない。私は神の許しが彼にあることを願うけれども，それは彼が許されるにふさわしい人間になってからの話だね」と書いているし[20]，翌1728年 1 月には，アイルランド総督の John Carteret にあてた手紙で，「最近あなたの友人の Walpole は，私の知る限り最も残酷な仕打ちをしました」と記した[21]。Swift は自分自身首相に含むところがあったから，彼を元兇に仕立てることに大きな喜びを感じていたに違いない。そして周知のように，1731年制作の名高い諷刺詩 *To Mr. Gay* では，Walpole のことを「詩人の敵」と評するようになる[22]。

Gay 自身はといえば，彼は一切口をつぐんでおり，書簡集を調べても，1730年11月の Swift あての手紙で，「私は Sir Robert をねたみはしない」

と意味ありげな一言を記している以外[23]，Walpoleに言及した個所はまったく見当たらない。しかし，Gayが首相に意趣を含んでいたことは，たとえば，死後に発表された*Fables*の第二集における辛辣な描写からも明らかである[24]。なによりも重要なのは，1727年10月の宮廷人事にGayが大きな落胆を覚えたことで，彼の失意はPopeおよびSwiftにあてた手紙にすこぶる大袈裟に表現されている。その一部分を紹介しよう。

（1） 宮廷がどのようなところなのか知らなければよかったと思うよ。僕は不毛の土壌に物を栽培しようと空しい努力をしていたんだ。やはり君の忠告にしたがって，Cumberland公のために*Fables*なんぞ書かなければよかったね。今はすっかり意気消沈して，遺書をつくる気力もない。僕はもう死んだも同然の人間だ。親愛なるポープ君，君は僕より長生きするはずだから，次の言葉を石に彫って僕の墓としてくれたまえ。

Life is a Jest, and all Things show it;
I thought so once, but now I know it.[25]

(2) 王妃の家庭にかかわる人事はすべて決まりました。私は一番末のLouisa王女の式部官に任命されましたが，年齢を理由に辞退することにし，できるだけ丁重に断わりの手紙を王妃様にさしあげました。そういうわけで，希望は今や一切なくなりました。失望することには慣れていますので，耐えることもできるでしょう。しかし，もはや希望がないのですから，失望することもないはずで，いわば恵まれた状態におかれています[26]。

（1）のPopeあての手紙には日付がないけれども，（2）の10月22日付のSwiftあての手紙はPopeとGayの連名となっているから，（1）は戴冠式の行なわれた10月11日と10月22日のあいだに書かれたと推測される。そして，これら2通の手紙が書かれてから約三カ月後の1728年1月29日，*The Beggar's Opera*がLincoln's Inn Fields劇場で上演された。この作品にはWalpoleへの揶揄が充満しているから，世人がGayの執筆の動機を宮廷人事への不満と結びつけたのも無理はない。Swiftも上演の成功

を喜び，「君のオペラがWalpoleにたいする公然たる侮辱だということは，奴も気がついただろうか。気がついてくれることを切に願っているよ」とGayにあてて書いている[27]。すなわち，個人的怨恨が執筆の動機として成立する余地は十分に存在するのである。だが，その場合，制作時期が1727年10月11日の宮廷人事の発表以降でなければならないことは，指摘するまでもない。

II. *The Beggar's Opera* の制作時期

The Beggar's Opera の制作過程に関する資料は豊富とは言い難いが，1727年の夏に書かれたとするのが18世紀以来の有力な説である。1735年，PopeはJoseph Spenceに「*The Beggar's Opera* はGayが私とSwift博士と一緒に過ごしていた頃に執筆された」と語っているが，三人がTwickenhamにあるPopeの家で過ごしたのは1727年の夏であった[28]。この定説が執筆の動機をWalpoleへの怨恨とする説と相容れないことは，第I節の解説によって明らかである。実はこの矛盾はあまりにも明白であって，これまで看過されてきたこと自体が不可解なのであるが，それでは二つの定説のうち，いずれが正しいのだろうか。

最初に結論を示せば，執筆の動機をWalpoleにたいする個人的怨恨とする説は絶対に成立しえない。先に触れたように，制作のプロセスに関する資料は確かに乏しいけれども，完成時期が1727年10月22日以前に属することは，Gay自身が明言しているからである。第I節で10月22日付のGayの手紙を引用したが，彼は式部官の拝辞をSwiftに報告したあと，次のように付け加えている。

> 覚えておいでになられると思いますが，あなたは情景描写を正確なものにするためにNewgate監獄の見学を勧めてくださいましたね。これから出かけてみるつもりです。もはや宮廷に伺候する必要もなくなりましたから，私の行動を妨げるものはなにもありません。しかし，実を申しますと私のオペラはすでに完成しているのです[29]。

The Beggar's Opera の執筆が宮廷人事への不満に端を発しているのだ

とすれば，この戯曲は戴冠式の行なわれた10月11日以降に書き始められ，上記の手紙の書かれる10月22日までには完成していなければならない。僅か10日で *The Beggar's Opera* を完成しうるか否かという問題は別として，Gay の書簡それ自体がこの可能性を否定している。「あなたは Newgate 監獄の見学を勧めてくださいましたね」と Gay が Swift にあてて記しているように，この作品の執筆には当初から Swift が関与していた。だが，彼は1727年 9 月にロンドンを去っており，10月当時はダブリンに帰っているから，10月11日以後に執筆が開始された場合，Gay が Swift に相談することなど不可能なのである。

もちろん，Gay は作品の完成を Swift に伝えたのちも，なお加筆訂正を続けたかもしれない。Pope が Swift に報じたところによれば，最終的に作品が劇場側に手渡されるのは，1728年 1 月であった。

> John Gay のオペラはまもなく手渡されるところです。Congreve 氏は上演の成功を案じていますし，私も同様です。この芝居が大きな騒ぎを惹き起こすだろうとは思いますが，それが拍手になるのか野次になるのかは見当がつきません[30]。

詳細な資料が存在しない以上，*The Beggar's Opera* の制作時期を正確に特定するのは不可能であるけれども，執筆の開始が戴冠式の行なわれた10月11日よりはるか以前，すなわち Swift がロンドンに滞在していた 4 月から 9 月のあいだであることは，前述の Swift あての Gay の手紙から明白である。女官の Howard 夫人がやはり1727年10月に Gay にあてて，「今はオペラを成功させることに専念すべきでしょう」と語っていることも，この時期には作品が完成していたことを裏付けている[31]。1728年 1 月29日の初演までの三ヵ月間は，推敲にも費やされたであろうが，実はなすべき仕事がそれ以外に多数存在した。Drury Lane 劇場の Colley Cibber に上演を断られたため，あらたに Lincoln's Inn Fields 劇場の John Rich と交渉を始めなければならなかったし，同劇場の主任楽士 Johann Christoph Pepush に作曲を依頼し，曲の選定を相談し，また配役という重要な問題も残っていた。こうした事情を考え合わせるとき，結局前述の

Popeの回顧に従って，作品の主要な執筆時期を1727年の夏とみなすのが最も妥当ではないだろうか。

この時期，GayがSwiftおよびPopeと起居を共にしていたため，二人が *The Beggar's Opera* の制作にかなり関与したのではないかという推測が，ほとんど上演と同時に広まっている。初演から二ヵ月後の1728年3月28日，SwiftがGayにあてて，「君のオペラについては百万もの噂が伝わってきているよ。例の歌がアンコールされ，観客が一斉にボックス席の大臣二人を凝視したというけれども，問題の歌の作者は私ということになっているそうだね」と書いているのも，その一例といえよう(32)。この歌は宮廷の腐敗を嘲笑した名高い第30歌のことである。

Gayの友人たちの協力の程度については，ここで考察する余裕はないが，一般に伝えられているほど彼らの関与が大きくなかったことは，強調しておく必要があるだろう。はるか以前の1716年，SwiftがGayに「泥棒や娼婦の登場するNewgate監獄の牧歌を書いてみてはどうだろうか」と勧めた事実は有名であり(33)，Popeもこの言葉が *The Beggar's Opera* の発端となったとJoseph Spenceに回顧している。だが，我々はPopeがさらに言葉を続けて，「私もSwift博士も字句の訂正程度のことは協力したけれども，*The Beggar's Opera* は全面的にGayの作品である」と付け加えてもいることを忘れてはならない(34)。

SwiftやPopeの関与が噂されたのは，両者にくらべて文才が劣るとみなされていたGayが，軽妙かつ辛辣な諷刺音楽劇を発表して大成功をおさめたため，世人が驚きを隠せなかったという事情にも原因があるのだろう。実は友人であるSwiftやPopeにも多少その形跡が発見される。さすがに温厚なGayも腹にすえかねたらしい。1731年，彼はSwiftにあてて，「私とあなたはひとつの点で共通していますね（もっと多くの点でも共通していればさらに嬉しいのですが）。つまり，私もあなたも他人のヒントに従って筆をとるのが嫌いなのです。私は自分の構想を自分の流儀であつかいたいと思っています」と書いている(35)。かつてはGayがHoward夫人に自信喪失を訴えていたことを思えば(36)，大きな変貌といえるが，こ

れにたいしてSwiftは，「ときには友人のヒントが運よく君の想像力にマッチする場合もあるよ」とやんわり切り返している[37]。

本題にもどって，結論をもう一度繰り返しておこう。*The Beggar's Opera*の執筆の動機を宮廷人事への不満に帰するとすれば，執筆の開始は1727年10月11日の戴冠式後でなければならないが，10月22日付のSwiftあての手紙でGay自身が明言しているように，この時期には事実上作品は完成していた。すなわち，Walpoleにたいする個人的怨恨に端を発するという定説は，絶対に成立しえないのである。

III. 定説破綻の意義について

*The Beggar's Opera*の執筆の動機と制作時期は，作者John Gayの伝記にかかわる基本的問題であり，この作品が今日なお大きな関心を集めていることを思えば，これを解明することの意義は指摘するまでもないだろう。だが，この場合はその点のみに止まらず，18世紀前半の文人とpatronageの関係についても，我々はひとつの重要なヒントを探り出すことができる。以下に，この問題に簡単に触れることにしたい。

Walpoleにたいする個人的怨恨という従来の定説が明瞭に打破された今，*The Beggar's Opera*に発見される首相への諷刺はなにを物語っているのだろうか。

Walpoleは1721年以来政権の座にあったが，王太子との不仲は周知の事実であったから，1727年6月にGeorge一世が死去したとき，国民は一斉に首相の失脚を予想した[38]。当時ロンドンに滞在していたSwiftもTory党政権の復活を夢見て胸をおどらせている[39]。だが，Walpoleは王室費を増額することで新王George二世の歓心を買い，その後も政権を担当し続けることがまもなく明らかになった。9月，Swiftは失意に打ちひしがれ，逃れるようにしてロンドンを去るのである[40]。

Gay自身はといえば，彼は1727年の夏，Walpoleが依然として政権の座に止まることを十分に認識しながら，なおも首相の諷刺を意図する音楽劇の作成に専念していた。*The Beggar's Opera*のごとき作品は，宮廷お

よび政府の不興を買うことを覚悟しなければ執筆しえないはずであるが，それでいてGayは，10月の宮廷人事の発表に大きな期待を寄せていたのである。これは放火と消火を兼業するに等しい態度であって，この彼の不可解な態度を完全に説明しえた論者はいまだ現われていない。

ひとつの解釈として，Gayは女官のHoward夫人を宮廷と自分の間のチャンネルとしていたので，Walpoleに媚びる必要を認めなかったと推測した論者もいる。18世紀のWalpole の伝記作者William Coxeもその一人であるが[41]，この解釈には一理があるかもしれない。新しい治世が始まったばかりの1727年の夏は，いまだ王妃とWalpoleは後年のような緊密な協力関係を結んでいなかったと思われるから，Gayが首相を敵にまわす余裕があると考えたとしてもそれほど不思議ではない。

今ひとつの解釈は，*The Beggar's Opera*における政治諷刺の要素を否定してしまうことである。1983年，David Huntの*TLS*への投書がきっかけとなって[42]，この作品の諷刺はWalpoleを対象としたものではないという説が一時学界をにぎわし，John Gay研究の専門家を自認する人びともこれに加担した[43]。この説が成立すれば，もちろん前述のGay の態度の不可解性は解消されよう。だが，J. A. Downieが直ちに反論しているように，こうした批評の笑止なことは論をまたない[44]。Gay のWalpole批判は実に巧妙であって，名誉毀損で訴えられることのないように二重，三重のフェンスをめぐらしながら，同時に世人から見て攻撃対象が一目瞭然という点で，大胆不敵な諷刺なのである。「君のオペラがWalpoleにたいする公然たる侮辱だということは，奴も気がついただろうか」とSwiftが述べたことは先に紹介したが，もちろん首相は直ちに認識した。その結果，*The Beggar's Opera*の続篇*Polly*は上演禁止処分となり，さらには1737年のLicensing Actの成立へとつながるのである。

Gayの真意がどのようなものであったにせよ，彼が権力を諷刺しつつ権力から厚遇されることを期待していた事実は否定すべくもない。実はこうした不可解な態度は，Gay以上にSwiftに際立って見られる特徴であった。Swiftは*The Drapier's Letters*をとおしてイギリス政府のアイルラ

ンド政策に抵抗し，さらに *Gulliver's Trawels* で Walpole を揶揄しておきながら，その後首相と直接交渉に入って崇拝者たちを戸惑わせている。だが，Swift 自身はさほど自分の行動に矛盾を感じていなかったのではあるまいか。彼の見解によれば，偉大な作家はその偉大さにふさわしい待遇を要求する資格があり，権力者が庇護の義務を怠るとき，作家は諷刺の才を用いて警告を発し，あるいは復讐を試みるのが当然だというのである。1727年11月，彼は Gay にあてた手紙で，「宮廷というところは，service ないし disservice の力を備えた者には，どのような希望をもかなえてくれる」と語っている(45)。もちろん，Swift の disservice の才能は抜群であって，たとえば1710年，*Examiner* 紙上で Marlborough 公攻撃のキャンペーンをくりひろげたとき，ついには公爵を解任に追いこむほどの威力を発揮した。後年，公爵夫人が「Swift を味方につけておくべきだった」と回顧したのは広く知られている(46)。Gay も Swift の例にならって自己の disservice の才を宮廷に示そうとしたのだとすれば，*The Beggar's Opera* における Walpole 諷刺に不可解なところは少しもない。

Swift と Gay にとって不運なことに，Walpole は彼らがはじめて遭遇する新しいタイプの政治家であって，作家をその文才のゆえに尊重するといった遊び心は一切持たなかった。夏目漱石の言葉を借りるならば，「利禄を懸け，地位を売って一意議員の買収に腐心したウォルポールの事だから，幾百の空位空官があったからというて，これを文学者などに分け与える気色は更になかった」のである(47)。Walpole のこうした実際的な態度は，同時に時代の変化の反映であったのかもしれない。この時期，文学の庇護者の地位は宮廷や政治家から出版業者の手に移ろうとしていた。Swift および Gay らの Tory 派の文人がいまだ伝統的な庇護の観念に固執していたのだとすれば，彼らはこの点においても保守的だったと評してよいだろう。

1727年10月の宮廷人事で深い失望を味わったあと，Gay が Swift に「希望は今や一切なくなりました」と述べた手紙の一節は，先に引用したが，実は Gay の猟官運動はその後もなお続けられた。Gay が完全に断念

するのは死の直前であって，1732年，Pope から王妃の頌徳詩を書くように勧められたとき，彼はそれを断わっている。1732年10月 7 日付の Pope にあてた返事の手紙には，一種の諦念がただよっており[48]，その二ヵ月後に Gay は死去した。

注

(1) R.M.Wardle, "Hazlitt on *The Beggar's Opera", South Atlantic Quarterly,* 70 (Spring 1971), 256-264.

(2) John Gay, *Poetry and Prose,* ed. V.A. Dearing (2 vols., Oxford, 1974); John Gay, *Dramatic Works,* ed. John Fuller (2 vols., Oxford, 1983).

(3) David Nokes, *John Gay : A Profession of Friendship* (Oxford, 1995). 以下，Nokes と略す。

(4) Robert D. Hume, *The Rakish Stage : Studies in English Drama, 1660-1800* (Southern Illinois U.P., 1983) ; Peter Lewis, *Fielding's Burlesque Drama* (Edinburgh U.P., 1987) ; Calhoun Winton, *John Gay and the London Theatre* (The University Press of Kentucky, 1993).

(5) Peter Lewis and Nigel Wood (eds.), *John Gay and The Scriblerians* (Vision Press, 1988) ; Christopher Fox,*Locke and The Scriblerians* (The Universisty of California Press, 1988) ; Patricia C. Brückmann, *A Manner of Correspondence : A Study of The Scriblerus Club* (McGill-Queen's U.P., 1997).

(6) 筆者がこの矛盾の存在に気づいたのは *The Beggar's Opera* の翻訳に従事したときであって（ジョン・ゲイ著『乞食オペラ』法政大学出版局，1993年），同書の「あとがき」でこの問題に触れると同時に，1994年，日本英文学会第66回大会（熊本大学）で「*The Beggar's Opera* の執筆の動機をめぐって」と題する口頭発表を行なったさいも，同じ問題をとりあげた。この小論はそれらの考察を敷衍したものに過ぎない。

(7) John, Lord Hervey,*Memoirs of the Reign of King George II*, ed. R. Sedgwick (London, 1931), I .98. 以下，Hervey と略す。

(8) W.A. McIntosh, "Handel, Walpole, and Gay: The Aims of *The Beggar's Opera," Eighteenth-Century Studies,* 7 (Spring 1974), 418.

(9) J.H. Plumb, *Sir Robert Walpole* (London, 1960), II. 175. 以下，Plumb と略す。

(10) J.A. Downie, "Walpole, 'The Poet's Foe'," *Britain in the Age of Walpole,* ed. Jeremy Black (Macmillan, 1984), 181.

(11) *The Beggar's Opera*, ed. Bryan Loughrey and T.O. Treadwell (Harmondsworth, 1986), 21.

(12) 筆者は「子供のごとく純真なGay」というPopeの有名な墓碑銘の言葉にかねて疑問を抱き，前述の拙訳の「あとがき」でもその点に言及したが，この問題をはじめて本格的に論じたのは注（3）に挙げたDavid Nokesの*John Gay*(1995)である。

(13) J.A. Downie, "Gay's Politics", *John Gay and The Scriblerians*, ed. Peter Lewis and Nigel Wood (Vision Press, 1988), 45.

(14) *Fables*は1727年3月には完成しているが，*Monthly Catalogue*に載るのはこの年の6月である。Nokes, 379を参照。

(15) Harold Williams (ed.), *The Correspondence of Jonathan Swift* (5 vols., Oxford, 1963-65), IV. 99. 以下，Swift, *Corr*と略す。

(16) 女官のHoward夫人はGayの庇護者の一人であった。[John Wilson Croker (ed.)], *Letters to and from Henrietta, Countess of Suffolk*(2 vols., London, 1824)を参照。以下，*Suffolk*と略す。

(17) Plumb, II. 175.

(18) William Coxe, *Memoirs of the Life and Administration of Sir Robert Walpole* (London, 1816), II.278-281. 以下，Coxeと略す。

(19) Nokes, 405.

(20) Swift,*Corr.* III. 250.

(21) Swift,*Corr.* III. 260.

(22) Jonathan Swift, *The Complete Poems*, ed. Pat Rogers (Harmondsworth, 1983), 466.

(23) C.F.Burgess(ed.), *The Letters of John Gay* (Oxford, 1966), 99. 以下，Burgessと略す。

(24) Coxe, II. 280.

(25) Burgess, 66-67. この二行詩は元来*Poems on Several Occasions*(1720)に収録されていたが，この手紙の意向に従ってGayの自選の墓碑銘となった。

(26) Burgess, 68-69.

(27) Swift, *Corr.* III. 267.

(28) Joseph Spence, *Observations, Anecdotes, and Characters of Books and Men*, ed. J.M. Osborn (2 vols., Oxford, 1966), I .57.（この書の注に，三人が一緒に過ごしたのは1726年の夏と記されているが，これはミスプリントだろう）。以下，Spenceと略す。

(29) Burgess, 69.

(30) George Sherburn (ed.), *The Correspondence of Alexander Pope* (5

vols., Oxford 1956), II. 469.

(31) *Suffolk*,I. 283.

(32) Swift, *Corr.* III. 276.

(33) Swift, *Corr.* II. 215.

(34) Spence, I. 57.

(35) Burgess, 113.

(36) Burgess, 47.

(37) Swift, *Corr.* III. 495.

(38) Hervey, I. 22-26.

(39) Swift, *Corr.* III. 219.

(40) Swift が Pope や Gay に別れも告げずにロンドンを去ったことは，Gay が10月22日付の Swift あての手紙で，「あなたはこっそり立ち去ってしまった」と書いていることからも察せられる。Burgess, 67を参照。

(41) Coxe, II. 280-282.

(42) *TLS,* 21 October 1983, 1161.

(43) *TLS,* 11 November 1983, 1247.

(44) 同上。

(45) Swift, *Corr.* III. 250.

(46) William King (ed.), *Memoirs of Sarah, Duchess of Marlborough* (London, 1930), 314.

(47) 夏目漱石『文学評論』(岩波文庫，1985)，上巻　163.

(48) Burgess, 129-131.